

文末の「―云」と「―爲」

戸川芳郎

古漢語の語彙は、その研究法を確立しつつあって、考究の成果が擧がっている。

ただし、すでに従来から指摘されている事実も、反復して吟味されて然るべきことがらと思われる。

いま古漢語の語助について、その「若」云「蓋」云「」焉」「」矣」の構文が、あい通じて斷定を避けた「……のような」「……かも知れぬ」「……ではなからうか」「……にちがいなからう」の文辭であること、これを明瞭に指摘したのは、宋代にまで溯る。

洪邁の『容齋續筆』七「遷固用疑字」に、蘇軾の「趙德麟字説」の「蓋麟云」を引いて、「其語舒緩、含深意」として『史記』封禪書・『漢書』郊祀志から、別に増補してアトランダムに用例を羅列している。

○雍（東有）好時、……自古……諸神祠、皆聚云。蓋黃帝時、嘗用事、雖晚周、亦郊焉。

○三神山、……蓋嘗有至者、諸僊人及不死之藥、皆在焉。……（曰）未能至、望見之焉。

○新垣平（以）望氣（見上）、言（長安東北）有神氣、成五采、若人冠纓焉。

○權火舉而祠、若光輝然屬天焉。

○（文帝）出長（安）門、若見五人於道北。

○蓋夜致王夫人（及竈鬼）之貌云、天子自帷中、望見焉。

○〔封禪大詔〕「天若遺朕士、而大通焉」。

○河東……迎鼎、……（至中山）……有黃雲蓋焉。

○登中嶽・太室。從官在山下、聞若有言「萬歲」云。

○祭……封禪祠、其夜若有光。

○方士（更）言蓬萊諸神、若將可得。

○見神人東萊山、若云欲見天子。

○天子爲塞河、興通天臺、若見有光云。…（後略）

以上の舉例の、一一の文意は、説明するに及ばないであろう。

しかるに、近時の、辭書に明瞭に指摘した説明が十分でないものが多い。「云」の例を採ってみよう。「云」の例「云云」「云爾（云耳）」「云爾哉」は、『漢語大詞典』2のム部に標出して、それぞれ「如此」「猶言而已、罷了。／猶言完了。」「用于語尾、表示如此而已。」「用于語尾、表示疑問。」とあって、その文章のニュアンスがいまひとつ感じとれぬ説解である。限定と強調ではなくて、推斷と辭讓の語氣を示していること、それを説いていない。

『漢辭海』三省堂・二〇〇〇では、「云」字で、助詞として、「このようだ。しかじか。…なのである。いう・イフ。文の内容をまとめ結ぶ文末の語氣助詞。訓讀では「（…ト）いフ」と讀むが、「…と言った」という意味はない」として「蓋所能言者、具於此云。」陸機「文賦」譯―要するに言えることは、ここに書き盡くしたのである。―の用例を掲げる。むしろ強い主張を避けた、丁寧なもの言い、といったニュアンスで貫かれている。

以上のことは、現在、本學の「史學特殊講義」で課本としている「封禪書」と「郊祀志」の、西漢期の文章についてメモしたまでのものである。

1000・九・三〇

以下、かつて発表した、文末の「爲」について、再録する必要を感じたので、掲載する。

古漢語の疑問文にあらわれる、文末の「爲」字について、いろいろな解釋がうまれている。

『經傳釋詞』卷二「爲」の條下で、「爲、語助也。」として、王引之が多くの例文をあげて、たとえば『論語』の、

雖多、亦奚以爲。(子路)

を、へ「以」は、用である。「爲」は、語助。「誦詩雖多、亦何用。」という意味である。皇侃の『義疏』で「亦何所爲用哉。」というのは、確當をえていない。と説明している。「-爲」は、文末におかれる疑問ないし反詰のニュアンスをそえるところの、のちでいう語氣詞である、とした。

近代の、中國の文法家、楊樹達が『詞詮』卷八「爲wei」の「(二七)語末助詞」で「疑問をあらわす」とし、おなじく裴學海が『古書虛字集釋』卷二「爲(平声)」の「〈爲〉猶〈焉〉也」で「疑問之詞」「乎」字と同義」としているのは、王念孫・引之の說をそのまま繼承しているものである。

最近の、『文言虛詞淺釋』(何樂士・敖鏡浩・王克仲・麥梅翹編著、北京一九七九)の「爲wei」では、やはり介詞・接続詞のほかに、語氣詞をまとめ、その「三、語氣詞」條下には、〈文末に用いられて、「何」「奚」「胡」などの虚詞と組みあわせて、疑問をあらわす。現代語の「-呢」と譯され、また譯にあらわれないこともある。〉として、舉例四條をくわえている。さらに、いま利用度の高い『古漢語常用字字典』(商務印書館、北京一九七九)では、「爲」字下の説解(251ページ右)に、

⑨ 文末の語氣詞。反詰または感歎をあらわす。『莊子』外物「死何含珠？」『漢書』趙皇后傳「今故告之、反怒！」

とあって、辭書のなかにまで定着したおもむきがある。

ところが、これらの辭書がでた昨年(一九八〇)、『中國語文』一九七九年第六期(総第一五三期)に、朱運申「疑問文の末尾の「爲」にかんして」という一文が載り、これらの「爲」は、動詞であって語氣詞ではない、としたため、波紋を投じることとなったようだ。今年の『中國語文』一九八〇年第五期(総第一五八期)では、編集部が〈疑問文

の文末の「爲」にかんする討論」と題して、各方面からの反対意見を掲載している。1、廖振佑「也談疑問句尾爲」、2、洪成玉・廖祖桂「句末的爲應該是語氣詞」、3、王克仲「略說疑問句尾爲字的詞性」、4、徐福汀「何以爲爲試析」の四篇の論文が、それである。王克仲氏は、さきの『虚字淺釋』の編者の一人であり、四篇のうちでもっとも詳細で多量の例文を挙げている。

一方、今年の本誌『漢文教室』にも、木立英世氏の「漢文訓讀の諸説について——現場での困難な一問題——」（第一三三号）と、それをうけて巢山恒明氏の「爲」字の語法理解とその訓讀」（第一三五号）とが、あらわれた。後者は、とくにその用法「6 句末の「爲」字の用法」で、〈すべて作爲の動詞〉と考えられる、として疑問語氣詞説をしりぞけている。

さて、古漢語の用法についての研究は、いわれるほどに進展しない。その原因の一つは、證據とする舉例と語法分析とが、ぴったり一致することは稀である。二つは、文献のとりあつかいに對する配慮がまちまちである。

そこで、要請されるままに、筆者のできる範圍で、この問題を考えてみることにした。

まず、文献として、『史記』でその内容が、『漢書』と重複している西漢初期〜武帝期の部分に注目してみよう。

『史記』八十九 張耳陳餘列傳、漢七年（前二〇〇）の記事、

1 貫高・趙午等十餘人、皆相謂曰「乃吾等、非也。吾王、長者、不倍德。且吾等、義不辱。今、怨高祖辱我王、故欲殺之。何乃汗王爲乎。令事成、歸王。事敗、獨身坐耳」。

趙王の張敖が、高祖の劉邦に輕易された事件。ここは、これに先公張耳の客人で趙の國相となっていた貫高らが憤激して、劉邦の謀殺を企てるようすを伝える。「汗王」とは、趙王張敖をまきこんで、王の手をよごさせること。「何乃…

爲乎」は、〈その必要があろうか〉の反詰の構造をしめすようだ。

『漢書』三十一張耳陳餘傳では、ほぼ同文を記す。

2 貫高等趙十餘人、相謂曰「吾等、非也。吾王、長者、不背德。且吾等、義不辱。今、帝辱我王、故欲殺之。何乃汗王爲。事王成、歸王。事敗、獨身坐耳」。

ただ、「何乃…爲」に作っていることは、注目すべきである。『漢書』が『史記』の記事を踏襲する場合、文體を統一して齊整し、『史記』のもっていた過剰な、順利でない表現を、抑制し雅順ならしめていることは、よく知られた事實である。この例のように、會話部分についても、當時の〈普通話〉に整理の手がくわえられているふしが見うけられる。「爲乎」は「爲」におき替えても、意味は変わらなかったであろう。「何…爲」は、「何…（爲）乎」と同じニュアンスをあらわしていた、と考えられる。この整理された個所に、唐の顔師古は、注をつけて、「言何爲乃汗染王。」という。〈どうして王の身まで汗染させるに及ぼうや、という意味だ〉と。

のちの、司馬光の編著『資治通鑑』十一 高帝七年（前二〇〇）には、つぎのようにある。

3 貫高・趙午等、皆相謂曰「乃吾等、非也。吾王、長者、不倍德。且吾等、義不辱。今、帝辱我王、故欲殺之。何乃王爲。事成、歸王。事敗、獨身坐耳」。

元の胡三省は、「洿、烏故翻、染浼也。」「言獨以身、坐弑帝之罪。」と注する。「何…爲」もまた、「何乃…爲乎」「何乃…爲」とおなじ、構造とニュアンスをもつ反詰文と考えられる。

つぎは、『史記』九十七 酈生陸賈列傳〔朱建傳〕の記事。呂后の没後、諸呂を退治した直後、淮南厲王の劉長が辟陽侯審食其を殺害したあと、文帝から疑われて平原君の朱建が追捕される身となった。文帝の前元年（前一七九）ごろか、その翌年か。

4 聞吏至門、平原君欲自殺。諸氏及吏、皆曰「事未可知。何早自殺爲」。

これを『漢書』四十三朱建傳では、

5 聞吏至門、建欲自殺。諸氏及吏、皆曰「事未可知。何自殺爲」。

と記し、「何（早）…爲」の構文は、不変。顔師古の「集注」は、無文。〈どうして（早まって）自殺をなさるのか（その必要はなからう）〉の意。「自殺」が動詞にあたる。

ついで、『史記』一百六 吳王濞列傳の、文帝時代の事件について。吳王（高祖の兄の劉仲の子、劉濞）の太子が長安で博局の争いから、皇太子に殺され、その喪が吳國に歸ってきて葬ることとなった。

6 至吳。吳王、愠曰「天下同宗、死長安、即葬長安。何必來葬爲」。復遣喪、之長安葬。

これが『漢書』三十五 荆燕吳・吳王濞傳になると、

7 吳王、愠曰「天下同宗、死長安、即葬長安。何必來葬」。復遣喪、之長安葬。

とある。〈どうして、わざわざ歸來させて（わが太子を）葬る必要があるぞ〉を表現するのに、「何必…爲」と「何必□」のように、「爲」あるいは「必」との意味上の重複からか、それを欠いていても、大體の意味において變りはなかった、と考えてよい。

なお、『漢書』四十九 鼂錯傳には、右の例とおなじい文帝時代に、皇太子への政治教育の必要を論じた上書を記録している。嚴可均の『全漢文』に「上書言皇太子宜知術數」と題して収める文章である。その中に、

8 此四者、臣竊爲皇太子急之。人臣之議、或曰「皇太子、亡以知事爲也」。臣之愚、誠以爲不然。

とあり、顔師古がそれに「言何用知事」と注する。「亡以…爲也」は、どうやら〈どうして（「知事」つまり術數—治政の方法を修得する）必要があるのか〉という反詰の構文であつたらしい。『史記』には、これについては、無文。

「爲也」については、つぎの例文を考えてみる。

『史記』一百十一 驃騎列傳の、元狩四年（前一二九）ごろの記事に、

9 天子、爲治第、令驃騎視之。対曰「匈奴、未滅。無以家爲也」。由此、上益重愛之。

とある。邸第を修治してやった武帝にむかって、驃騎將軍霍去病の辭退のこたえである。『漢書』五十五 霍去病傳には、

10 上爲治第、令視之。對曰「匈奴、不滅。無以家爲也」。由此、上益重愛之。

とあって、「無以…爲也」は、同文。『資治通鑑』十九 元狩四年（前一二九）條下では、「驃騎」を「票騎」に改めたほかは、『史記』のと同文をあげる。

しかるに『三國志』十九 魏書・陳思王植傳に收める曹植の「自試を求むる上疏」に、右の霍去病の語をうつした次の一文がみえる。

11 昔、漢武、爲霍去病治第。辭曰「匈奴、未滅。臣無以家爲」。

さいわい『文選』三十七にも「求自試表」として、まったく同文を收録している。李善は、この個所に典故を示す『漢書』の文なり」を注するのみであり、五臣注の李周翰も、二、三の訓詁を附しているだけである。しかしながら、「無（以）…爲也」「無…爲」は、さきの8の「亡（以）…爲也」と同構文ではないか、と考えられる。とすると、これもへどうして（いえ屋敷などが）要りましようか」の意であろう。『文選』の和訓が、古くから「家ヲ以テ爲ルコト無ケン」と讀ませているが、この訓讀から逆に意味を推定することは、すこぶる困難である。さらにまた「無（以）…爲」と「何（以）…爲」との関係となると、どの程度のニュアンスの異動があるのか、もはや不明である。が、

一つの問題としてここに指摘しておかなければならない。

ここで顔師古の注釋をもとめて、いっそう「何…爲」構文のもつ意味を探ってみよう。

『史記』一百二十二酷吏・張湯列傳において、元鼎二年（前一五）、三公の一、御史大夫にあった張湯が、諸行跡のすえ、武帝に責められて自殺に追いこまれた。趙禹の責讓の言に、

12 禹至、讓湯曰「君何不知分也。君所治、夷滅者、幾何人矣。今、人言君、皆有狀。天子重致君獄、欲令君自爲計。何多以對簿爲」。

とある。へ…天子は、おまえを獄に繋ぐのをはばかられ、「自爲計」つまり引決して自裁することを望んでおられると。「對簿」とは、文書による取調べの訊問にむかって、辯明すること。『漢書』五十九張湯傳では、最後の一句を「何多以對爲」とするほかは、まったく同文である。これに、顔師古が「言何用多對。」と注した、へ（いまさら取調べ書に）餘計な辯明などつけ加えてどうなるものか。（なんの役にも立たぬワ）との意味だ」と。「何…爲」は、「何用…」に解釋されている。

ちょうどそれに接して同個所に、自殺直後の張湯の、母親のことばを留める。『史記』には、

13 湯母曰「湯、爲天子大臣、被汙惡言而死。何厚葬乎」。

とあり、『資治通鑑』二十二元鼎二年（前一五）にそのまま轉載している（趙禹の問責の語は、収録していない）が、『漢書』本傳のほうには、

14 湯母曰「湯、爲天子大臣、被惡言而死。何厚葬爲」。

とある。例文1-2のばあいの對照とやや異なっていて、「何…乎」を「何…爲」に、手をいれて調整したもののごとくに見える個所である。もちろん文意は同趣、いずれもへ（なんで鄭重に葬る必要があろうゾ）の意。

つぎに、『史記』二十六 封禪書。元鼎四年（前一二三）六月、汾陰の后土祠の兆域から寶鼎が發掘されて、甘泉宮に迎え入れた。これをめぐって、封禪を企てた公孫卿の「札書」とそれに疑いをかけた所忠のやりとりを記している。

15 所忠、視其書不經、疑其妄書、謝曰「寶鼎事、已決矣。尚何^{〇〇}以爲^{〇〇}」。

『史記』十二 孝武本紀は、司馬遷の没後、その缺佚部分に、「封禪書」關係の記事をとって補足された、とされている。褚少孫がそうしたのか、錢大昕のいうように、司馬遷より後の時期にそうなったのか、いずれにしろ、問題の個所は、15とまったくの同文を載録しているのである。

ただし、『漢書』二十五上 郊祀志上には、同文ながら、

16 所忠、視其書不經〔師古曰、不合經典也。〕、疑其妄書、謝曰「寶鼎事、已決矣。尚何^{〇〇}以爲^{〇〇}〔師古曰、謂不須更言之。〕」。

のごとく、顏師古「集注」によって「尚何以爲」が〈いまさらどうすることが出来るか。なんの役にもたため。〉もうどうしようもない、という意味だ」と理解される。したがって、張守節が、この顏氏の解釋をふまえて、『史記正義』に、「所以「謝」公孫卿、言寶鼎已決致矣、不須^{〇〇}上^{〇〇}此書^{〇〇}。」（「封禪書」『會注考證』引）と注するのである。『通鑑』二十元鼎四年の條下には、公孫卿の「札書」上奏の事がらを記すが、所忠の語は録さない。

以上の9-16は、いずれも西漢、武帝期の例文である。なお、二、三例を加えておこう。

『史記』一百十 匈奴列傳。元封元年（前一一〇）、武帝は長城の北に行幸した際、朔方郡から郭吉を匈奴の單于に遣使した。單于に直接會見した郭吉のことばのなかに、

17 吉曰「南越王頭、已懸於漢北闕。今、單于、能^〇即前與漢戰、天子自將兵待邊。單于、即不能、即南面而臣於漢。

何○徒○遠○走○、亡○匿○於○幕○北○・寒○苦○無○水○草○之○地○、母○爲○也○」。語○卒○、而○單○于○大○怒○、…とある。この記事を、『漢書』九十四上匈奴傳上はつぎのように記す。

18 吉○曰○「南○越○王○頭○、已○縣○於○漢○北○闕○下○。今○、單○于○、即○能○前○與○漢○戰○、天○子○自○將○兵○待○邊○。即○不○能○、亟○南○面○而○臣○於○漢○。何○但○遠○走○、亡○匿○於○幕○北○・寒○苦○無○水○草○之○地○爲○」。語○卒○、單○于○大○怒○、…

さらに『漢書』六武帝期、元封元年の條下には、いっそう調整された記事として、

19 遣○使○者○、告○單○于○曰○「南○越○王○頭○、已○縣○於○漢○北○闕○矣○。單○于○、能○戰○、天○子○自○將○待○邊○。不○能○、亟○來○臣○服○。何○但○亡○匿○幕○北○寒○苦○之○地○爲○」。匈○奴○驚○焉○。

とある。『史記』の「何徒…、母爲也」を『漢書』が「何但…爲」と改めているのは、どうしてか。「母爲也」が（そういうことは）やめたらよろしい」という意なのか、それとも8の「亡…爲也」や9・10の「無…爲也」とおなじい反詰文なのか、むしろ『漢書』は、後者のように理解していて「何…母爲也」の重複した表現を整理したのではなからうか。しかるに、『資治通鑑』二十二元封元年の條下には、班馬兩史をつきまぜた文體に仕立てているが、『史記』の「何徒…母爲也」の形のほうを踏襲している。

20 遣○使○者○郭○吉○、告○單○于○曰○「南○越○王○頭○、已○縣○於○漢○北○闕○。今○、單○于○、能○戰○、天○子○自○將○待○邊○。不○能○、即○南○面○而○臣○於○漢○。何○徒○遠○走○、亡○匿○於○幕○北○、寒○苦○無○水○草○之○地○、母○爲○也○」。語○卒○、而○單○于○大○怒○、…。

十世紀の趙宋時代には、おそらく「何…爲」の構文のニュアンスは不明になっていたであろうし、「母爲也」は強い禁止の意味にとる以外になかったのではなからうか。しかも班馬、『通鑑』ともども、この個所を理解しうるような注釋は、なにもない。

『漢書』六十八金日磾傳は、匈奴の休屠王の子、金日磾の記事。武帝の弄兒となった日磾の子を親の日磾が叱る

場面で、〈なんで我が兒をおこる（必要がある）のかイ〉と武帝が弄兒をかばう。

21 弄兒、或自後、擁上項。日磾在前、見而目之。弄兒、走且啼曰「翁、怒」。上謂日磾「何怒吾兒爲」。

荀悦の『漢紀』は、昭紀、元狩二年（前一二一）の項にこの記事を繋けているが、この年は父の休屠王が殺害された年であって、金氏十四歳にあたる。右の記事は、武帝の晩年のころの出来ごとであろう。したがって『通鑑』は、後元二年（前八七）に記す。例19とこの例21は、14や16の例文と同一の定型をなして、會話としての取意はほぼ確かであろう。

もう一つ。『漢書』五十四 蘇武傳の例。天漢元年（前一〇〇）、蘇武が匈奴に派遣された時、すでにそこに亡降していた衛律に投降を勧められる。それへの蘇武の罵倒のことば。

22 武、罵律曰「女爲人臣子、不顧恩義、畔主背親、爲降虜於蠻夷。何○以○女○爲○見○。…」

この「何○以○女○爲○見○」に、顏師古が「言何用見女爲也」と注するところを見ると、この構文を「何○以○…○爲○（也）」の變型と理解していたのではないか。〈汝^{おまえ}などに會う必要はあるものか〉の意。『史記』には、本傳なく、他にもこの

文は見當たらない。『資治通鑑』二十一 天漢元年（前一〇〇）に、『漢書』とまったく同文を載せ、胡三省は、顏氏の注をそのまま援引する。やはり理解しにくい一句であつたらしい。反詰のニュアンスをもつ文型である。少なくとも、顏氏と胡氏が、この文を「以…爲」「以爲…」の型として解することの誤りであることを、注記したことになる。王念孫は、『讀書雜誌』漢書十で、ここを『漢紀』昭紀、元狩六年に引くのを参考しつつ、「何○以○見○女○爲○」に作るべし、とする。

すでに『史記』の内容とは對照比較することはできないが、西漢、成帝期の記事として『漢書』九十七下 外戚・孝成趙皇后傳に、顏師古の注をとどめる一文がある。

成帝の寵愛を獨占した趙飛燕姉妹は、姉が皇后に、妹は昭儀となるが、ともに男子がない。元延二年（前一）、許美人が出産した際、妹の趙昭儀が成帝の違約をなじって許氏の立后を妨げた。

23 對、以手自擣、以頭擊壁戶柱、徒牀上自投地、啼泣、不肯食、曰「今、當安置我。欲歸耳」。帝曰「今、故告之、

反怒爲。殊不可曉也」。帝、亦不食。昭儀曰「陛下、自知是、不食爲何。…」

と。へいまは、私をしたいようにさせておいて下さい。帰りたいただけなのです。へいま、ことさら打ち明けたのに、かえって怒るとは。何ともさすべからざるやつだ。』（小竹武夫訳『漢書』下、列傳Ⅱ、三八三頁上）この、成帝の語「故告之、反怒爲」に、顔師古が、

故以許美人產子、告汝、何爲反怒。

と注し、さらに、趙昭儀の、「不食爲何」のことばに、おなじく顔注が「何爲不食也」とある。前者は、へどうして逆に怒る（必要がある）のかイの意で、「…爲」が反詰のニュアンスを示すようであるが、後者は（食事）を召しあがらないのはなぜですか（同上訳『漢書』）で、單に理由を問いただしているように讀める。顔師古の注解だけからは、その兩者を區別することはむづかしい。『資治通鑑』では、許美人のこの事件を審査した、哀帝の即位の年、建平元年（前六）に、この記事を繋げ、ほとんど同文を録載する。「反怒爲」には、胡三省は、顔注を「故以許美人生子、告汝、何爲反怒。」として引くが、「不食爲何」を『通鑑』では「不食何爲」に作っていて、そのためか胡注は無文。

以上の諸例を通觀し比較するに、「何…爲」は、あるいは、「無…爲」「亡…爲（也）」をも含めて、一つのまとまったニュアンスをあらわす反詰の文型であることが、判然としてくる。その、示す意味は、顔師古が「何用…」「不須…」

と注することく、〈…する必要があるか（いまさら…するに及ばぬ）〉として、まとめられる。そして、隋唐の時期には、この構文はすでに理解しにくいものであったことを、これらの附注の存在から、推定されうる。

また、西漢期の文例の状況からみて、この構文は、會話のなか以外には現われず、したがって話しことばとして、使用されていたことを確かめることができる。つまり文章語ふうの文體では、ない。

さて、視點を轉じて、東漢・魏晉へ降るのではなく、『史記』のなかの文例を、先秦期の記事のうちに遡らせることとしよう。

『史記』四周年記に、西伯となっていた姬昌（文王）が、虞・芮の訴訟を裁斷するはなしが載っている。

24 西伯、陰行善、諸侯皆來決平。於是、虞・芮之人、有獄不能決、乃如周。入界、耕者皆讓畔、民俗皆讓長。虞・

芮之人、未見西伯、皆慙。相謂曰「吾所爭、周人所恥。何往爲。祇取辱耳」。遂還、具讓而去。

「何往爲」はへどうして出掛ける必要がいまさらあるかの意。

『史記』の三家注には、ここの訓詁はない。ただし、この西伯斷訴には、べつに「間田」説話が存在した。張守節の『正義』の援引する、魏王泰『括地志』が、間原（地名。河北県内、いまの山西省平陸縣にあった。）の名稱の由來を説明する。それによると、『詩』の毛傳が典據になっている。『毛詩』大雅・緜の「虞芮質厥成 文王蹶厥生」の、毛萇の『詁訓傳』は以下のとおり。

「質」、成也。「成」、平也。「蹶」、動也。

虞・芮之君、相與爭田、久而不平。乃相謂曰「西伯、仁人也。盍往質焉」。乃相與朝周。入其竟、則耕者讓畔、行者讓路。入其邑、男女異路、斑白不提挈。入其朝、士讓爲大夫、大夫讓爲卿。一國之君、感而相謂曰「我等小

人、不可以履君子之庭。乃相讓以其所争田、爲間田而退。天下聞之、而歸者四十餘國。

〔釋文〕「虞芮」如銳反、二國名。「蹶」俱衛反、動也。「盍往」胡臘反。「其竟」音景。「提挈」苦結反。「間田」音閑。

〔毛詩正義〕（傳）自「虞芮之君」以下、當有成文、不知出何書也。：

この『毛傳』が「周本記」と対応する文句は、「盍往質焉」であろう。この、孔穎達の『毛詩正義』には、

「盍往歸焉」、「家語」作「盍」。「盍」、訓「何不」也。此相勸之辭、宜爲「盍」也。

とあって、これによると、「毛詩正義」の據ったテキストは、「盍：歸焉」に作っていたが、現今の毛詩鄭箋本は、『釋文』本と同じく、「盍：質焉」に作る。へどうして出かけていって判斷を仰がないのか。（さあ往こうよ。）の意。ここでは、「周本記」の「何往爲」とは、さかさまの表現になっている。『孔子家語』好生には、『正義』に指摘するごとく、「吾聞」西伯、仁人也。盍往質之。」と、見える。ちなみに、この「間田」説話は、『尚書大傳』西伯戡耆（『文選』十、潘岳『西征賦』「虞芮愧而訟息」李善注引）や『說苑』君道にも見え、大雅「緜」詩を「虞人與芮人、質其成於文王」と讀んでいるが、ここで問題にしている文句は、見えない。

「周本記」の記事にもどすと、これは『毛詩』とは別個の系統の説話にもとづいており、司馬遷はそれを西漢現在のことばに翻譯して、記載したにちがいない。

つぎに年代の古い記事として、『史記』三十八宋微子世家の「宋襄之仁」の文章にみえる。

25〔襄公十三年（前六三八、魯僖二十二）〕冬十一月、襄公、與楚成王戰于泓。：公曰「君子不困人於阨、不鼓不成列」。子魚曰「兵、以勝爲功。何常言與。必如公言、即奴事之耳。又何戰爲」。

「奴事」とは、師事・兄事などと同じ語構成、〈奴隸として事仕する〉こと。「又何戰爲」の文、『春秋』左氏傳にも

公穀二小傳にも、見えないが、意味は明瞭であろう。かえって「何常言與」の個所に、裴駰の『史記集解』が、「徐廣曰、一云、尚何言與。」として一本を紹介しているのが、注目されるほどである。

つぎは、『史記』六十四司馬穰苴列傳の記事。司馬穰苴は、齊の景公〔前五四七—四九〇在位〕の將軍とされているが、戰國期ころの人物説話にもとづいた記録を轉載しているようである。景公の使者、莊賈が穰苴に會見しにゆく。26夕時、莊賈之至。穰苴曰「何後期爲」。賈謝曰「不佞、大夫親戚送之、故留」。

「後期」は、約束した面會の日時におくれること。ここも、意味は説明するまでもなく、明瞭。

『史記』六十五孫子吳起列傳では、魏の文侯〔前四四六（四二三）—三九七（三八七）在位〕の將軍となった吳起が、秦を擊破する時のはいし。

27起之爲將、…與士卒分勞苦。卒有病疽者。起、爲吮之。卒母、聞而哭之。人曰「子、卒也。而將軍自吮其疽。何哭爲」。母曰「非然也。往年、姬公吮其父。其父、戰不旋踵、遂死於敵。吳公、今又吮子。妾、不知其死所矣。是以哭之」。

一兵卒の病む腫瘍のウミを吮^すってやる吳將軍と、その兵卒の母が、死んで歸るにちがいないわが子のために、あらかじめ哭して死喪を弔った故事。「何哭爲」は、へどうして（あらかじめ戦死を弔う）哭泣の禮をする必要があるかの意。『資治通鑑』は、この記事をその冒頭、卷一、威烈王二十三年（前四〇三）の條下に、轉載している。文章は、全く同じいが、「何哭爲」には、無注。

『史記』六十六伍子胥列傳のは、むしろ事實としては、前一例より遡るようである。白公勝の事件にからまる記事。楚の太子建（子木）が鄭人に殺害され、その子勝^{しょう}は吳に亡命していた。吳王夫差^{ふさ}のとき楚の惠王が召還し、國境ぞいの鄢^{えん}に居らしめ白公を號した。父の恨みを鄭に報復しようとしていたが、かえって庶父^{おじ}の子西（令尹子椒、公子申）

や子綦（司馬子期、公子結）は鄭國を晉から救った。

28 白公勝、怒曰「非鄭之仇、乃子西也」。勝、自礪劍。人問曰「何^{○○}以^{○○}爲^{○○}」。勝曰「欲以殺子西」。子西聞之、笑曰「勝、如卵耳。何^{○○}能^{○○}爲^{○○}也」。

みずから劍を礪いで、子西らを襲撃しようとした白公勝に、ひとが「何^{○○}以^{○○}爲^{○○}」と問う。事件は、『春秋左氏傳』哀公十六年（前四七九）に詳しい。そこには、

29 勝、怒曰「鄭人在此、讎不遠矣」。勝、自厲劍。子期之子平、見之曰「王孫、何^{○○}自^{○○}厲^{○○}也」。曰「勝、以直聞。不告女、庸爲直乎。將以殺爾父」。平、以告子西。子西曰「勝、如卵。餘、翼而長之。楚國第、我死、令尹・司馬、非勝而誰」。

と。問うたのは、司馬子期の子である。「何^{○○}以^{○○}爲^{○○}」を「王孫、何^{○○}自^{○○}厲^{○○}也」に作っている。白公勝は、楚の平王の孫、太子建の子。「何^{○○}…也」は、『史記』のほうの「何^{○○}能^{○○}爲^{○○}也」と同構文であろう。前者は、疑問文、後者は、反詰文。ただし後者は「何^{○○}…爲^{○○}（也）」ではない。『史記』の「何^{○○}以^{○○}爲^{○○}」も15・16の例文と同用法であるのか、いまは不明といわざるをえない。司馬貞の『史記索隱』は、『左傳』哀十六年と對比しているにすぎない。

いま問題は、ここで有名な文章にさしかかった。『史記』八十四 屈原列傳に、かの「漁父」の辭賦を載せる。

30 漁父曰「…舉世混濁、何不隨其流、而揚其波。…何^{○○}故^{○○}懷瑾握瑜、而自令見放爲」。

楚辭の、王逸の『楚辭章句』巻七に、「漁父者、屈原之所作也。…而漁父、避世隱身、釣魚江濱、欣然自樂。時遇屈原川澤之域、怪而問之、遂相應答。」とその題辭に注することく、漁父が連續して質問する文體であり、すべて「非…歟」「何故…」「何不…」「何故…爲」の疑問・反詰の文型である。『楚辭』では、

31 漁父曰「…世人皆濁、何不泥其泥、而揚其波。…何故深思高舉、□自令□放爲」。

となっていて、「何故…爲」の構文じたいは變らない。話しことばの文型「何…爲」を、問答體とはいえ、辭賦に用いているのは、「…爲」が韻字であるからであろう。江有誥『楚辭韻讀』漁父によると、「移・波・醺・爲」を古韻の歌部に属せしめている。意味は、『史記』とともに、へどうして…（の行爲をなすほど）の身でありながら、自分からすすんで放逐されるようになさる必要があるだろうか。屈原の没年は、楚の頃襄王九年（前二九〇）か、同二十二年（前二七七）か、である。

記事は、ついで楚漢の際にはいる。『史記』七項羽本紀、西楚元年（漢王元年、前二〇六）の、鴻門之會の場面。

32 沛公曰「今者、出、未辭也。爲之奈何」。樊噲曰「大行不顧細謹、大禮不辭小讓。如今、人方爲刀俎、我爲魚肉。何辭爲」。於是、遂去。

この語句、すでに説明を要しないであろう。『漢書』一上高帝記元年十二月・同四十一樊噲傳、いずれにも、この文は脱却していて、無文。『資治通鑑』九漢記一高帝元年には、この個所をそのまま再現し、「如今、人方爲俎、我方爲魚肉、何辭爲。」の樊噲のことばを載せている。胡三省の注は、無文。

『史記』七項羽本紀、西楚四年（漢王四年、前二〇三）の、廣武山（いまの河南省滎陽縣内）で楚軍と漢軍が對峙して、情勢が膠着した。

33 丁壯苦軍旅、老弱罷轉漕。項王、謂漢王曰「天下匈匈數歲者、徒以吾兩人耳。願與漢王挑戰、決雌雄。母徒苦天下之民父子爲也」。漢王笑謝曰「吾寧鬪智、不能鬪力」。

「母徒…爲也」は、例8の「亡…爲也」。9・10の「無以…爲也」と同型の一種とみられる。裴駰が『集解』で、

李奇曰「挑身獨戰、不復須衆也。」「挑」音茶了反。瓚曰「挑戰、…」。

として、李奇を引くのは、「母徒…爲也」を「何…爲」と同じニュアンスの文、つまりへもうこれ以上…する必要はありませんまい」の意をあらわす構文と理解していたことを示す。『漢書』三十一項籍傳の漢王四年では、

34 乃使人謂漢王、曰「天下匈匈、徒以吾兩人。願與王挑戰、決雌雄。母○徒○罷○天下○父子○爲○也」。

とあって、「母徒…爲也」は、同文。ただし、無注。『通鑑』十高帝四年の條下には、『史記』の文を採用して、『漢書』を採らない。

『史記』九十二淮陰侯列傳、漢四年の記事。前例と同年、楚漢兩軍の持久戦で、漢軍が不利な情勢のなかで、東方の齊で韓信が假王として自立しようとする。

35 張良・陳平、躡漢王足、因附耳語、曰「漢、方不利。寧能禁信之王乎。不如因而立、善遇之、使自爲守。不然、變生」。漢王、亦悟、因復罵、曰「大丈夫、定諸侯、即爲眞王耳。何○以○假○爲」。

かくて、韓信を齊王に仕立てた。『漢書』三十四韓信傳では、「何以假爲」は、同文。〈…した以上、眞王のなにもでもない。〉いまさらなんで假王など必要あらうゾ」の意。班馬ともに、無注。『通鑑』は、高帝四年（前二〇三）に、例によって『史記』の文章をそのまま採録する。

そして『史記』七項羽本紀の、項羽の最後の場面。西楚五年（漢王五年、前二〇二）の冬。

36 烏江亭長、檣船、待、謂項王、曰「…願大王竊渡。今、獨臣有船。漢軍至、無以渡」。項王、笑曰「天之亡我、我○何○渡○爲…」。

『漢書』三十一陳勝項籍傳では、

37 羽笑曰「乃天亡我、何○渡○爲…」

とある。ともに、無注。『通鑑』十一高帝五年（前二〇二）十二月、やはり『史記』と同文で『漢書』を採らない。

その採否の選擇に、司馬光の見識とそれをつつむ古文家の思想が、うかがわれる。ただし、ここの文意はすでに明瞭そのもの。

ついで、『史記』の例文は、はじめの1へとつづく。

小論のおわりに、訓讀について。傳統的な讀みは「何ゾ：スルヲ爲サン」「：爲スコト無ケン」、これを改良して「何スレゾ：ンヤ」「：無カラシカ」と。「何：爲」「無：爲（也）」を倒置の文體と考えないとして、「爲」を文末の助詞とするならば、文意の取りやすい後者の讀み方が、むしろ妥當であろう。

なお、ほかに「何：爲」の用例として、

- ①『漢書』匈奴傳上——中行説、輒曰「何。以。言。爲。乎」。（『史記』匈奴列傳、作「何。以。爲。言。乎」）
- ②『史記』孝文本紀——上曰「：吾奉先帝宮室、常恐羞之。何。以。臺。爲」。（『漢書』文帝紀、同文）
- ③『漢書』東方朔傳——「上」召問朔、覽「何。恐。朱。儒。爲」。
- ④『史記』汲黯列傳——黯、數質責湯、曰「：何。乃。取。高。皇。帝。約。束、紛。更。之。爲。：」。、『漢書』本傳、作「何。空。取——

（同文）——爲」

- ⑤『漢書』貢禹傳——「貢禹言引俗謠」曰「何。以。孝。弟。爲。：。何。以。禮。義。爲。：。何。以。謹。慎。爲。：」。。
- ⑥『漢書』元后傳——太后驚泣曰「：且使鬼神無知。又。何。用。廟。爲」。

などが見える。また「無：爲也」を補う用例として、

- ⑦『史記』衛世家——公孫敢闔門、曰「母。入。爲。也」。（『左傳』哀十五年衛出公輒十三年、作「無。入。爲。也」）
- ⑧『史記』陸賈列傳——「陸生」謂其子、曰「：數見、不鮮。無。久。恩。公。爲。也」。（『漢書』本傳、作「數擊鮮。母。久。溷。女。爲。也」）

⑨『史記』田叔列傳——田叔曰「上母以梁事爲也」。（『漢書』本傳、作「上無以梁事爲問也」）

などが、挙げられる。ただし①⑨は、問題がのこる。また「何能爲」の用法については、このたびは検討を見あわせた。

（注）この問題を扱った專論に、牛島徳次氏〈「何以爲」の「爲」について〉『中國語學』一一五、東京一九六一、と最新刊の西田太一郎著『漢文の語法』角川小辭典〈35-M〉、東京一九八〇、などがある。

一九〇・三・二八稿

以上、『漢文教室』一三六號、一九・三

以上の、論考に對して、掲載誌『漢文教室』の編集者がわから、反論をもとめて、次號に載せられたのが、以下の西田太一郎氏（京都外國語大學）の「爲」の字の特異な用法である。これを併せ掲載することによって、この種の古漢語の研究法の相異が分明となることを考え、本誌『三松』をわずらわせた。

『漢文教室』（大修館書店）の一三六號に、戸川芳郎氏の「文末の「爲」字について」という論文が載っていたが、戸川氏が文章を読み誤っている箇所がかなり多くあり、また、言わんとしていることがよくわからないので、これを批判し、あわせて卑見を述べるために筆をとった。したがって戸川氏の論文を参照しながら読んでいきたい。なお私は本來、經學・中國思想を勉強している者であって、中國語學には素人である。専門誌もとってはず、急いで借用したような次第で、研究の経過・現状にうとい。また訓讀の史的研究をしたわけでもなく、普通の學び方をしただけである。これらの點をあらかじめお含みおきください。

さて戸川論文中での文章の読み誤りについては、いずれその箇所で觸れるが、それとは別に、方法論上の誤りがある。氏は主として『史記』の記事から文末に「爲」の字のある文例を求め、『漢書』などと對比しながら、漢初から

武帝期まで、ついでさかのぼって周代、そこから次第にくだって戦國・漢楚の際へと、時期的に分類している。

このようなことをしてどのような効果があるのだろうか。事実として何の結論もできていないのである。それよりもむしろ、氏が雑然と挙げる諸文例を整理する必要がある。

それではどのように整理するかというと、文末に「爲」の字のつく文を簡素化して、種類の型に分類するのである。

A 「何V爲」型。Vは動詞を意味する。「何」の字は他の疑問詞である場合もある。この型は戸川氏が列挙する文例番號では1 2 3 4 5 6 14 18 19 21 24 25 26 27 30 31 32 36 ③④がこれにあたる。

B 「何以N爲」型。Nは名詞を意味する。「以」の字は「用」になっている場合もある。この型で「何以文爲」(論語、顔淵)、「何以田爲」(左傳、襄公一七年)の「文」や「田」などは動詞・名詞のいずれにも用いられるが、ここでは「文ること。文飾」「田^{かり}すること。田獵」という名詞とする。これは後述する「無以:爲」型とともに點線の部分が原則として名詞だからである。これに對してAの「何:爲」と後述の「無:爲」の場合では、點線の部分の名詞であることはない。「:」すること無し」などと訓読される場合はあるが、本來は動詞である。ただし、この名詞・動詞にはこだわる必要はない。さてBの「何以N爲」型は、戸川文例では12 22 35 ①②⑤⑥。

C 「無V爲」型。戸川文例では33 34 ⑦⑧。

D 「無以N爲」型。戸川文例では8 9 10 11 ⑨。

E 「何以爲」型。戸川文例では15 16 28。

F 「無以爲」型。戸川文例には現れない。

EとFとは「以」の下にNが省略されたものである。さて以上の六つの型を再び整理すると、

「何V爲」――「無V爲」 「何以N爲」――「無以N爲」

「何以爲」——「無以爲」

の三つの對應關係ができる。つまり「何V爲」「何以N爲」「何以爲」は疑問・反語の型であり、「無V爲」「無以N爲」「無以爲」は否定の場合の型である。戸川氏が「無V爲」「無以N爲」を反詰（日本での反語にあたる）としているのは誤りである。^{（注1）}

さてこのように整理しておいて、「爲」の語法上の役目を考える。個々の文例についてその場その場でつじつまを合わせていると、説明に不統一が生じるからである。

この文末の「爲」について、徒來どのような説があるか。その代表的なものをつぎに挙げる。

- (1)、楊樹達（一八五—一九五）はその『詞詮』で、疑問を表す語末詞としている（全面的に同一ではないが、語末詞のことをそののち多くの學者は語氣詞という）。この説の系統には裴學海氏の『古書虛字集釋』、楊伯峻氏の『文言虛詞』があり、王力氏も『古代漢語』三九四ページでこの説をとる。この疑問語氣詞説にはつぎの二つの反對論がある。(ア)「爲」が疑問語氣詞ならば、「…爲乎」「…爲也」「…爲哉」のようにさらに語氣詞を重ねるはずはない。しかし「…乎哉」「…也哉」などのように語氣詞が二字以上続く場合はほかにしばしばあるので、この反對論は成立しがたい。(イ)、疑問語氣詞説は「無V爲」「無以N爲」などの「爲」に適用できないという致命的缺陷があり、したがって疑問語氣詞説は疑問という限定語のつく限りは誤りである。

- (2)、馬建忠（一八五—一九〇〇）『馬氏文通』は卷七の「爲字之用」において、『史記』張耳陳餘列傳の「何乃汗王爲乎」（戸川文例1）について、これは「乃何爲汗王乎」と同じで、「何…爲」は「何爲…」を前後に分置したものだといふ。^{（注2）}この説については、ただ一例だけではあるが、『穀梁傳』定公十年に「兩君合好、南夷之民、何爲來爲」とあり、すでに上に「何爲」とあるからには下の「爲」は「何爲」を分置したものだとは言えない。またこの説は「無V爲」

「無以N爲」についてどう説明するかが不明である。

(3)、清初の劉淇^{りゅうき}は『助字辨略』の上平声の「爲」の項で語辭^{ごじ}だといっており、王引之^{（七六一八四）}は『經傳釋詞』の「爲」の項で語助^{ごじ}だといっている。この語助説は早くも唐代からあり、王引之も『禮記』曾子問「正義」に見える説を引いている。「禮記正義」では助語とあるが、同じことである。^{（注3）}語辭とか語助とかいうのは、嚴密な定義はできないが、おおむね、特別の意味のない口調上の語である。

この語助説を採用するならば、文末に「爲」をもつ文の大部分がうまく理解できるのである。もっとも、訓讀では讀まないから奇異な感じはするけれども。

まず「何V爲」は「何V」と同じになるから、「何辭爲」（戸川文例32）は「何ゾ辭セン」（どうして辭去のあいさつをしようか↓辭去のあいさつはしなくてよい）、「何渡爲」（戸川文例36）は「何ゾ渡ラン」（どうして渡ろうか↓渡らない）、「何乃汗王爲乎」（戸川文例1）は「何ゾ乃チ王ヲ汚サンヤ」（どうして王の體面を汚したりしようか↓汚したりはしない。「乃」は、王を汚すなどは自分の意図しないことであることを表すための語）となる。戸川氏は文例1の説明で『「何乃…爲乎」はへその必要があるか』の反詰の構造を示すようだ』という。反詰の構造であることは確實であるが、「必要があるか」はこの「何V爲」型の不可缺の要件ではない。文章の前後の關係、つまり文脈から「…の必要があるか」「…することができようか」などの意味になるだけである。なお「何往爲」（戸川文例24）は「何ゾ往カン」と讀み、「どうして往こうか。行かない。行かないでおこう」の意となる。この文例24の説明で、戸川氏は誤りを犯している。^{（注4）}

「無V爲」型はさきの「何V爲」に對應するものだから、すぐにわかる。「母レ入爲也」（戸川文例⑦）は「入ル（コト）ナキナリ」「入ル（コト）ナカレ」（入^{はい}ってはならぬ）、「無久恩公爲也」は「久シク公ヲミダスコトナキナ

リ」(長いあいだ諸君に迷惑をかけることはしないのである)となる。同様に「母_ニ徒苦_ニ天下之民父子_ニ爲也」(戸川文例33)は「……苦しめることのないようにしよう」または「……苦しめてはならないのだ」の意。ここの説明で戸川氏は誤りを犯している。^(注5)

「何以N爲」「無以N爲」について言うまえに、「何以爲」「無以爲」について言おう。王引之は『經傳釋詞』で、『大戴禮』五帝德篇の「夫黃帝尚矣、女何以爲。先生難_レ言_レ之」について、「以、用也。爲、語助也。言_ニ黃帝之事遠矣。汝何用_レ問也」といい、『論語』子張篇の「無以爲也」についても「以、用也。爲、語助。……言無_レ用_レ毀也」といつている。ここで注意すべきは、王引之は「何用問」「無用毀」といつて「問」「毀」の字を補っているが、すでに「爲」を語助としている以上、「爲」の字を「問」「毀」に置きかえたのではないということである。「何以」「無以」の下に省略された語を、それぞれの前の文章の「宰我問_ニ於孔子_ニ曰、……請問黃帝者人邪、抑非_レ人邪」や、「叔孫叔毀_ニ仲尼_ニ」から引き出して、それを補ったのである。もしこの場合の「爲」の字を「問」や「毀」に置きかえたとするならば、「何以N爲」「無以N爲」の説明が不可能になるのである。

さてそれでは王引之が「以、用也」といつている「用」とはどういう意味であるか。『論語』に「焉用_レ佞_ヲ」(公冶長)、「焉用殺」(顔淵)、「焉用稼」(子路)などがあり、この「用」は反語や否定形で用いると、「……を必要としない。……は必要でない」の意になり、「不用」はいまの中國語でもその意味で用い、「不」と「用」とを合わせて一字にした活字もあるほどである。したがってさきの「何用問」は「どうして問う必要があるか」の意、「無用毀」は「……する必要はない」の意であり、「問うことは不必要だ」「……することは不必要だ」となり、不必要なことをする人をとがめたり批判したりする場合は、「問うてもむだだ」「……してもむだだ」という意味にもなる。これに類似する他の意味の可能であることはいうまでもない。

右のことがわかれば、「何以N爲」「無以N爲」は容易に理解できる。

故俗皆曰、何以孝弟爲、財多而光榮。何以禮義爲、史書而仕宦。何以謹慎爲、勇猛而臨官。（漢書、貢禹傳。戸川文例⑤）

これは「財多 而光榮」「財多 而光榮」「財多 而光榮」などと讀む（以下同様）。「何以孝弟爲」は「どうして孝弟を必要としようか↓孝弟を必要としない」無以孝弟爲である（以下同様）。したがって意譯すれば、「だから世間の人はみな言っています。孝弟なんかは不必要だ、財産が多ければ世にときめく。禮義なんかは不必要だ、讀み書きがじょうずならばお役人になれる。謹慎なんかは不必要だ、ばりばりときびしくやれば役所で上役になれると」（孝弟⇨孝悌）。

同様にして戸川文例35「何以假爲」、①「何以言爲乎」⑥「何用廟爲」、またこれに對應する型の9「無以家爲也」もすぐにわかるはずである。次の文は戸川譯は誤りであるので特にここに引用する。

此四者、臣竊爲皇太子急之。人臣之議或曰、皇太子亡以知事爲也。臣之愚、誠以爲不然。（漢書、鼂錯傳。戸川文例8）

「以上の四つの點は、わたくしははばかりながら皇太子様のために（之⇨此四者を）急務と考えます。臣下どもの討議では、なかには、皇太子様はものごとを知る必要はないのだと申す者もおります。わたくし愚か者めは、誠に、そうでない（⇨臣下どもの言うことは間違いだ）と存じます」。

戸川氏が擧げていない型に「無以爲」があり、すでに少し觸れたが、補っておく。

公曰、請問民微。子曰、無以爲也、難行。（大戴禮記、四代）

臣愚以爲、非冠帶之國、禹貢所及、春秋所治、皆可且無以爲。（漢書、賈捐之傳）

孔廣森の『大戴禮記補注』によると、「徵」は「驗^{スル}人善惡^ヲ之法」であり、「無以……」には「行^{フコト}之^ヲ惟難^シ、無^シ以^テ問^フ爲^ル」という注がある。哀公が「人の監別法をお尋ねする」と言ったのに對し、孔子は「そんなことをお尋ねになってもむだです。行にくいのです」と言ったのである。賈捐之傳の文は、今の海南島の珠厓という地域が背叛したが、そんな未開地域は當分捨てておいて中華本土の政治に努力しなさいと天子に勧めた文で、「わたくし愚か者めは、礼儀をわきまえた國、太古の禹貢の範圍内、孔子の春秋での中華の領域でなければ、みなしばらく討伐無用になさるがよろしいと存じます」の意である。

以上のような方法でおおむね片付くと思うが、疑問のある文があるので、それらについて述べる。「何以女爲見」

(戸川文例22) は、王引之の父の王念孫が『讀書雜誌』で言うように「何以^レ見^レ女爲」が正しく、原文のままでは意味が通じない。また「吉日^ク……今單于能^{ゼンウ}即^ニ前^ニ與^ハ漢戰^{ハバ}、天子自^{ラヒキキチ}將^ヲ兵^ヲ待^{タンニ}邊^ニ。單于即^{モシ}不^シ能^{ハバ}、即^チ南面^{シテ}而臣^{タレ}於^ニ漢^ニ。何^ソ徒^{ラニ}遠^ク走^リ、亡^{スルヤ}匿^{スルヤ}於^ニ幕北寒苦無^キ水草之地^ニ、母^ハ爲^ス也^ト」(戸川文例17) は、もしこのままならば、「どうしていたずらに遠く逃走し、砂漠の北の寒く苦しく水も草もない地に逃げ隠れるのか。(そんなことは) しなされるな」となる。しかしどうも落ち着かないし、この上文の「能^ニ即^ニ前^ニ與^ハ漢戰^{ハバ}」は誤りで、『漢書』の「即^{モシ}能^ク前^ニ與^ハ漢戰^{ハバ}」が正しく(あとの「即^シ不^シ能^{ハバ}」と對比すればすぐにわかる)、『史記』の文に乱れがあるから、「母」は衍字(餘計な字)で、「何徒遠走、亡匿……無水草之地爲也」が本來の形であったかも知れない。

「何以爲」はすでに述べたように「何以^ニ爲^ル」の省略として一應解決したが、例外がある。

白公勝怒^{リテ}曰^ク、非^ズ鄭^ラ之^レ仇^{トスルニ}、乃^チ子西也^ト。勝自^ラ礪^グ劍^ヲ。人問^{ヒテ}曰^ク、何以^ニ爲^ル。勝曰^ク、欲^{スト}以^テ殺^{サント}子西^ヲ。(史記、伍子胥列傳。戸川文例28)

仇は鄭でなくて子西だと決めて、白公勝が自ら劍をといでいると、人が「何以爲」と問うたのであるが、「何以^ニ礪^グ劍^ヲ

爲」の意では「どうしてとぐ必要があるか」となり、下の答えに續かない。何以を續け「何以爲」(どうしてしようか)と解すると、反語になって、ここでは妥當でない。「何以爲」「何以爲」と讀むと「なぜするのかわいぬのか」の意になって、どうやら通じる。しかし「何以爲」(何をそれでするのか)の意に解する方がよくはなからうか。そうすれば、下の「これで子西を殺そうと思っている」という答えにうまく合致するのである。

偉哉造化。又將奚以汝爲。將奚以汝適。以汝爲鼠肝乎。以汝爲蟲臂乎。(莊子、大宗師)

これは死にかけている人に莊子流の人が語りかけている言葉である。人の死體を狐狸が食ったり、死體が腐敗してうじがわいたり、肥料になって生長させた植物を食べる者がいたりして、万物が變化する造化の偉大さを言ったものであるが、上下の繼がりから考えると「何におまえをするであろうか。どこへおまえを行かせるであろうか」の意となる。

呂叔湘氏はその『文言虚字』の「以・爲」の項で、「何以家爲」を「要家做什么」の意としている(古くは『馬氏文通』、卷二、詢問代字の條にも類似の説がある)。この場合の「要」もまた一筋なわで行かない語らしいが、とにかく「何以家爲」を「何以家爲」の意に解したように思われる。直譯すれば「何を家を用いてしようか」となり、意譯すれば「家を用いて何もしない↓家なんか何にもならない」となる。この説に従うならば「何以爲」「無以爲」(N爲)と訓讀することとなる(理解の仕方は王引之語助説とは異なるが、文章の窮極の意味内容には大差はない)。そしてこの説を證明できる資料がある。

瞻長子尚歎曰、父子荷恩、不_三早_二斬_二黃皓_一、以致_三敗_レ國_二殄_レ民_一。用_レ生_二何_一爲。乃_レ驅_レ馬_二赴_二魏軍_一而死。(華陽國志、卷七。『十八史略』三國にも引く)

「諸葛瞻の長子の尚は嘆息して、父子がともに國恩を受けているのに、早くに黄皓を殺さなくて、かくて國を敗北させ人民を破滅させる結果を招いた。生きていることで何をしようか（↓生きていてもなににもならない）と言って……」という意味である。この「用生何爲」は「一人逃死、禍及萬家、何以生爲」（後漢書、黨錮傳）と同じ意味に違いない。また晉の王湛が叔父の王濟の所に『周易』のあるのを見て「叔父用此何爲」と尋ねたが（『世說新語』賞譽篇の注に引く鄧粲晉書）、それが今の『晉書』王湛傳では「叔父何用此爲」になっている。これは反語でなく、「これで何をするのですか」「これを何に使うのですか」の意味であるが、とにかく「用此何爲」と「何用此爲」とは同じ意味である。

このように見てくると「何_ラ以_レN_ヲ爲_ス（または「::爲_{サン}）」と解する方が決定的に良いように思えるが、「何以N爲」が本來からその意味であったかは疑わしい。なぜかというところ、「夫子所_レ論、欲_ニ以_レ何_ヲ明_{セント}」（史記、太史公自序）、「脩正_{スルモ} 尚_ホ未_ダ蒙_ラ福_ヲ、爲_{シテ}邪_ヲ欲_{スル}ニ以_テ何_ヲ望_{マント}」（漢書、外戚傳下）のように、「以何V」と書いて、「それで（そうすること）何を……するか」を表すのが普通であるから、「以N何爲」型が早く現れるはずなのに、先秦秦漢の文にはこの型がなかなか見当たらず、「何以N爲」型だけがあり、そのうちさきに述べた『莊子』の「奚以汝爲、奚以汝適」のような意味で用いられるのは特異な例と思われるからである。「爲」以外の語を用いた文、たとえば「誰にこれを與えるのか」「誰をこれで殺すか」「何をこれでVするか」（日本語の語順に拘泥しないこと。「以」「以此」「以N」が用いてあること）の意味の文がどのような型になっているか、これらを傍證資料として多量に採集集めて比較検討するならば、解決法が見出せるかも知れない。「何以N爲」が本來「以N何爲」と同義であったのか、語助説者の言うように「何_ソ用_レN_ヲ」の意であったかは、現時点では断定しかねる。なお「何以N爲」を「以N何爲」と同じだとしても、その場合の「爲」では「何V爲」「無V爲」の「爲」は説明できない。「何_ヲ渡_{リテ}爲_{サン}」と訓讀して「渡って何

をしようか」の意に解するなどは、絶対に容認できないのである。

以上、卑見をも加えながら、小生の知る範囲の諸説を紹介した。次に「爲」が文末にくる他の型について略述する。その一つは「何能爲」「無能爲也」である。この場合の「爲」は普通の動詞であって語助ではなからう。というのは「可^シ下^レ無^クシテ^{スル}勞^{スル}師^{コト}而^テ得^ル上^レ城^ヲ、子何^ソ不^ル爲^サ」(國語、晉語九。軍隊を疲れさせることがなくて町を占領することができる。あなたは どうしてしないのか 相手の内應の申し出を受け入れないのか) のような「爲」の用例はいくらでもあり、「何^ノ惡^カ之^レ能^ク爲^{サン}」(左傳、襄公一四年) という表現もあるからである。したがって「何能爲」は「何^ノを^ヲすることができようか」、「何^ノ能^ク爲^{サン}」(どうしてすることができようか)とも解することができる)、無^キ能^ク爲^ス一^ス也」は「…することのできることはないのだ」、つまり俗に言えば「何ができようか」「何もできないのだ」の意である。ただし「爲」を語助としても文章の意味に變わりはない。

次に「……之爲」であるが、多くの文例から考えると、王引之のいうように「……之有^レ」と同じと考えるのがよい。『左傳』成公二年の「何臣之爲」を「何^ノ臣^ノ之^レ爲^{ラン}」と解すると「無^レ臣」の意になるという人もあるが、この場合の「臣」は臣の身分の構成員のことではなく、臣としての本質、臣たる職分(上文に「臣^ハ治^メ煩^ヲ去^ル惑^ヒ者^也」とある)を意味するのである。わたくしはこのようなときは「何^ノ臣^ノ之^レ爲^{ラン}」と讀む(他の語の場合もすべて同様だというわけではない)。

次に「不^レ何^ノ爲^{サン}」について述べる。『詩經』の鄘^{よう}風相鼠に「不^{シテ}死^セ何^ヲ爲^{サン}」「不^{シテ}死^セ何^ヲ俟^マ」とある。「死なないで何をしようか↓死なないで何もしいない↓死ぬ以外に何もしいない↓死ぬことをするだけだ↓死ぬばかりだ↓死ぬよりほかはない」となり、同様にして「死ぬのを待つだけだ」となる。『漢書』霍光傳の「不^{シテ}亡^ビ何^ヲ待^タ」(滅びること待つばかりだ)も同一の語法である。ただし戸川文例23「不食爲何」やそれを引用した『通鑑』の「不食何爲」に

については今のところ未詳である。「不食謂何」^⑥となっているテキストもあり、その上文の「自知是」「自如是」^⑦として『續列女傳』に引用されていて種種の疑点があるからである。なおこの注を戸川氏は「許美人が子を生んだので」^⑧（「以」汝に告げた」と解したらしいが、「ことさらに、許美人が子を生んだことを」（「以」汝に告げた」と解しないと解さないといけない。解釋に誤りがなかったとしても、とにかく「告汝」の上の讀點は誤り。

終わりに授業上の要領であるが、「何渡爲」などは極めて特異な語法であるので、餘り深入りしないのがよからう。試験などでは、特異なものは採點から除外されることになっている。萬一このような特異なことがらで人生が左右されることがあれば、餘程の災難とあきらめるよりほかはない。このような特異な語法にこだわるよりは、普通ありきなどの文章を誤りなく理解できるようでありたい。

注1 戸川氏は「亡以…爲也」はどうやら〈どうして…（中略）…必要があるのか〉という反詰の構文であったらしい』（文例8の説明文）、『…それとも8の「亡…爲也」や9・10の「無…爲也」とおなじい反詰文なのか』（文例19の説明文）といい、かくて四ページ上段で『無（以）…爲』と「何（以）…爲』との関係となると、どの程度のニュアンスの異同があるのか、もはや不明である』という。

注2 動詞の上にある「何爲」については、『公羊傳』隱公元年三月の「曷爲」（何爲に同じ）について、『經典釋文』（經書の文字の發音を書いた本）に「曷爲 如^ハ字、或^ハ于^ノ僞^ノ反。後皆同^ニ此」^⑨とあり、「ナンスレゾ」「ナンノタメニ」の二様の意味になる読み方を示しているが、通例「ナンスレゾ」と読むのは周知のとおりで、多分、中國との交流において「爲」を平聲（wéi）に讀む慣習が日本に伝わっていたのであろう。しかし現代中國では「爲什麼」の意味にとる方が便利なので去聲（wèi）で讀んでおり、日本の中國語學者の多くもそのように信じている。しかし本

來は平聲で讀んだものと思う（『助字辨略』の上平聲の「爲」の條、『經傳釋詞』の「謂」の條を参照。香港『華語大辭典』『華語詞典』でも平聲）。ところで「何（以）…爲」などの「爲」についての中國の學者の説は、平聲が多いが、去聲説もあり、明示しない人もいる。『釋文』にはこの場合の音を記さない。記さなければ平聲であるから、わたくしは劉淇に倣って平聲説をとる。

注3 『禮記』曾子問の「正義」に「一解云、無用爲者、無用此之爲、爲是助語」とあるが、これは「…無用此之謂、…」の誤りであろう。つまり「無用爲とは、これ（かたしろ）を必要としないという意味（＝謂）で、爲（＝無用爲の爲）は助語である」の意。正義が自分の解説文に「爲」を使うはずはない。

注4 戸川氏は『史記』周本記の「西伯陰行善、諸侯皆來決平」以下と、『毛詩』の大雅・縣の「虞芮質厥成、文王蹶厥生」の毛傳（戸川氏のいう毛萇は毛亨が正しい）の「虞芮之君、相與爭田」以下を引き、周本記の「何往爲」をへどうして出掛ける必要がいまさらあるうかの意、毛傳の「盍往質焉」をへどうして出かけていって判断を仰がないのか。（さあ往こうよ。）の意とし、この毛傳の語を『周本記』の「何往爲」とは、さかさまの表現になっている」という。「盍往質焉」（行つて仲裁裁定をしてもらおうじゃないか）は田地の境界争いの起こったときの言葉であり、「何往爲」（行くまい。行かないでおこう）は、周國へ行つて譲りあいの風習を見、西伯に實に行かないで引き返すときの言葉であることは、容易にわかるはずである。それになぜ「さかさまの表現になっている」というのか、不可解である。なお間田説話を持ち出したり、『史記』と『毛詩』（毛傳の誤り）とは別個の系統の説話に基づいていと言ったりしているのは、「自虞芮之君以下、當有成文、不知出何書也」が毛傳の文の「正義」であるのに、それを別のことに感違ひしていることから生じている。また『尚書大傳』や『說苑』の文について「大雅「縣」詩を「虞人與芮人、質其成於文王」と讀んでいる」といい、あたかも『詩』の句を「虞芮質厥成文王」と讀み違えたよう

に言っているのも納得できない。

注5 「願與漢王挑戰、決雌雄。母徒苦天下之民父子爲也」に、裴駰はいいんの集解は「李奇曰、挑身獨戰、不復須衆也。挑ハ音ト茶了ノ反。瓚さん曰、挑戰、擣シ燒敵ヲ求ム戰、古謂ハ之ヲ致師ト」という注をつけている。戸川氏は「擣燒」以下の文を省き、「不復須」だけに傍點をつけ、「李奇を引くのは、「母徒…爲也」を「何…爲」と同じニュアンスの文、つまりへもうこれ以上…する必要はありますまい」の意をあらわす構文と理解していたことを示す」という。これまた誤りである。挑戦とは、一般には臣瓚のように、戦いをいどむ、敵軍をいざない引っぱり出すの意に解するのであるが、李奇は一騎打ちの意に解したのである。「須」は「まつ」または「もちふ」と訓じ、「不復須衆」は軍勢または多人數を必要としないの意であって、戸川氏が、この「不復須」の語により、「母徒…爲也」を、もうこれ以上いたずらに天下の民の父子を苦しめる必要はありますまいの意に解するのは、誤りであり、かつ、的外れである。なお挑戦方法は一騎打ちでおこなったらしいが、挑戦という語そのものが一騎打ちを意味するかどうかは疑わしい。挑身の意味も未詳である。

以上、『漢文教室』一三八號、一六六

この反論に對して、私は、當時、外務省の特別研究員（文化專員）として、北京の日本大使館に勤務中（一九八一年四月―八二年三月）であったことと、歸國まぎわに、西田太一郎氏が死去した（一九八二年二月三日）こともあって、その後、論及の方法を中心とする十分な論點のフォローもせず、現在にいたった。

さて、王海棻『古代疑問詞語用法詞典』浙江教育出版社、一九九二・四は、『古漢語疑問詞典』（同上出版社、

一九八七)の増訂版として出た、中國語の疑問をあらわす語彙(「疑問詞語」)に關する用法とその疑問文型總まくりの辭典である。

遠古の甲骨文から清代にいたる諸文獻から文例を搜集し、それを語義・文意にそつて一五類に大別し、その語法機能にもとづいて一〇〇〇以上の文型「公式」を組みたてて(「構擬」)いる。

疑問をあらわす語彙には、

①單音節語——疑問代名詞・疑問副詞・表疑數詞・表疑作用を具え否定副詞と否定性の動詞・選擇接續詞と接續作用を具える副詞と動詞〈是〉。

②複音節語——複合接續詞・複合疑問詞

③短語

④固定した「格式」

を含めている。

一五類とは、1 人的詢問 2 事物詢問 3 度量詢問 4 時間詢問 5 年壽詢問 6 處所詢問 7 原因詢問 8 情狀詢問 9 方法詢問 10 商權詢問 11 感嘆詢問 12 反詰詢問 13 反復詢問 14 比較詢問 15 抉擇詢問 である。

私の本論考でとり上げた語法は、この『疑問詞典』のなかの「7 原因詢問」(どうして／なぜ…なのか)に分類されている文型に属して、「12 反詰詢問」(…があらうか、イヤ…)には含まれていない。その7のなかで、

「安以……爲」「安用……爲」「何必……爲」「何故……爲」「何乃……爲」「何……爲」「何爲……爲」「何以……爲」「何用……爲」「胡以……爲」「惡用……爲」「烏用……爲」「奚……爲」「奚以……爲」「奚用……爲」「焉以……爲」「焉用……爲」

の、文型を指摘して、それぞれ文例を擧げて説明する。「-爲」は、ここでは語氣助詞として扱っている。